

農地から高峰まで

土地と調和して暮らす

南アルプス地域は比較的コンパクトでアクセスしやすいため、ここでは山のふもとと農地の間で栄えた里山の名残や急勾配の斜面に生息する多様な野生生物と植物など、複数の環境を体験できます。

里山という語は、通常小規模な農業と林業を営む住民が自然と調和しながら暮らしていた山のふもとの集落を指します。山から流れてくるきれいな雪解け水を使って水田を作り、カシなどの樹木を木炭にしました。茅葺き屋根を作るのに使われたススキなどの建築材料でさえ地元で集められました。森林地域は、狩猟や木を切る時以外は大抵足を踏み入れることはありませんでした。

何百年もの間、南アルプスの山の多くは未知の領域でした。足を踏み入れるには危険すぎたり勾配が急すぎたりすることが多かったのに加え、多くの山は神が住むところであり人間が入ってはいけないとされていました。人間の干渉を免れたおかげで、南アルプスにはさまざまな生物が生息しています。

自然保護区域である国立公園の山麓に人々が住み続けているため、国立公園付近の地域には今でも里山の概念が存在します。しかし、山の高いところには集落は残っておらず、一部地域は人の立ち入りが禁止され、南アルプスの野生生物が自由に歩き回れるようになっています。

この地域には、ニホンザル、キツネ、タヌキ、シカなど、約 30 種の哺乳類が生息しています。サルとシカは数が増えたため、最近では、農家の人々は低地の果樹園を柵で囲い、食べ物を求める動物たちから守る必要があります。高地においても、繊細な高山植物を保護するために柵が使用されています。

山中には、美しいさえずりが特徴の鮮やかな青と白のオオルリなど、さまざまな鳴鳥が生息しています。この地域を代表する鳥にはライチョウがいます。この南アルプスの住民は日本の特別天然記念物とされています。

森や山に生息する大型哺乳類には、胸部に三日月形の白い斑紋がありツキノワグマとも呼ばれる Asian black bear やカモシカなどがいます。高地に住むのを好むオコジョは、夏は茶色と白、冬は真っ白になる毛色で周囲の風景に溶け込みます。暖かい季節には、山の斜面をひらひらと舞う色とりどりの蝶を見られるかもしれません。